

2009年8月5日 現地演習

村落フィールドワーク：世帯の暮らしから村を見る（8月5日）

8時にセランを出発。セランから離れるにつれて田畑が広がり、ジャカルタではあまり見られない水牛や、竹を編んでできた壁の家屋が多く見られるようになる。村に近づくと路面が荒れた道路が続き、バスが大きく揺れる。バスはゆっくりと進む。

15時半頃、隣村まで到着するが、パンクした自動車が道路をふさぎ、前に進めない。しばらく外に出て空気を吸ったり、写真を撮ったりする。潮の匂いがするが、近くに山も見え、一面田んぼが広がるすてきな場所である。しばらくして、人々はどこからか連れてきたヤギの足を縛りはじめた。抵抗するヤギは大きな鳴き声をあげたが、人々は慣れた手つきでヤギをオートバイの後ろに乗せて、タマンジャヤ村のほうへ連れて行った。

村まで歩いていき、16時半に無事タマンジャヤ村に到着する。タマンジャヤ村はスモール郡にある観光村である。早速ホストファミリーと対面し、自己紹介をする。タマンジャヤ村の協同組合の中心的存在であるコマルさんは、「国立公園はわれわれの資産だが、村人にとってもよいものでなければならない。今後この村が観光村としてより発展していくためのヒントをください」と話した。

明日の夕方まで各自ホストファミリーと過ごし、①疑問に思ったこと、驚いたことを見つけ、②それに関する事実を探し、③自分で仮説をたて、④その事実を立証するための調査方法を考える、という課題が出される。疑問はどんなに小さなことでもいいそうだ。

オリエンテーション後、ホストファミリーとともに滞在先に向かう。古川さんは1人暮らしのスワさん、原田さんは漁師のナラさん、竹口さんは隣組長のスワンディさん、下山さんは教師のラムリさん、私は木彫り職人のアルマツさんの家にお世話になる。佐々木さんのホストファミリーの都合がつかなくなったため、アルマツさんの姉夫婦のもとへ滞在することとなった。よってアルマツさん宅にもともに向かう。アルマツさんは奥さんと生後10ヶ月の娘さん、両親の5人家族である。しかし、姉夫婦は隣に、兄夫婦は裏に住んでいる。トイレや食事を姉夫婦の家で済ましたりと、家族間で行き来がよく見られた。アルマツさんは農業をする傍ら、ウジュンクロン名物のサイの置物を作る仕事をしている。

自分が疑問に思うことはないか、じっくりと観察してみる。挨拶は両手を合わせてすること、人の座っているごきは踏まないように、また腰をかがめて通ること、井戸が家の中にあること、水浴び場に5センチほどの魚が1匹いること、アルマツさんと私が椅子に座って話している間、奥さんは常に床に座っていることなど、どれも小さなことだが、普段気にとめないことのなかに、自分の知らないことがたくさんあることを実感した。

（記録：平田生子）